



世界的に見る環境問題

WCSをめぐって④

藤原英司

ウ・タント報告

今日、私たちは世界を丸ごと値ぶみすることに少しづつなれてきた。値ぶみといっても金銭的にいくらと値段をつけるのではなく、物事を考える時、地球を一つのものとして追ってわが国の民衆の間にひろまりつつあるが、国連が人間環境会議の開催をきめた一九六八年ごろの日本というのは、少なくとも環境問題については、地球規模はおろか、国内でさえ全国規模での対応がやっと始まったばかりだった。わが国で初の公害白書が国会に提出されたのは一九六九年五月だから、日本では政府も民衆も、自分達の身辺できごとを追われつつけていたわけだ。日本では公害があつちでも、こつちでもという形で多発し、初めて一つの公害が一つの町や一つの県の問題でなく、他の町や他の県にまたがる全国的な問題だという認識に達しはじめていた。それは、ちょうどヨーロッパで各国の公害が、互いにつながりをもつたものとして理解され、国際的に環境会議の必要性が唱えられた時の認識と似ていたとみていいだろう。日本での差し迫つた公害認識は、日本全土を一つの環境としてとらえる目を確保したが、ヨーロッパでは、それよりやや広く、欧州大陸を一つの視野におさめ、国連の舞台において、それが全世界という形で会議に拡大されたとみることができよう。

当時、わが国では全国的环境情報がすべてとらえられていたわけではなく、問題が大きく知られるようになったある種の公害について割合よく知られはじめたていどにすぎ

ず、その情報の初の集積報告が一九六九年の第一回公害白書だった。

同じことを国連のウ・タント事務総長は、人間環境会議の準備として、まとめていた。つまり世界の人間環境についての問題点をひろいだし、きたるべき会議では何を討議し、どういう形の会議にすればいいのかということをもとめた国連事務総長報告をまとめたのだ。この報告は一九六九年五月に公開され、各国へ送付されて、大きな反響を呼んだ。それはわが国に例をとるなら、初の公害白書が全国民に与えた衝撃に匹敵するものといえよう。つまり、この国連事務総長報告がでるまで、世界の環境問題を全地球的な視野で総合的にとらえた要領のいい資料はなかったからだ。むしろ世界の環境情報というものは、それまでも存在した。例えば国際自然保護連合(IUCN)や世界野生生物基金(WWF)が集積した世界の環境情報は当時すでに十年分ぐらゐの蓄積があつた。IUCNやWWFの活動報告と年次報告は、毎年プリントや冊子、本などが出ているので、それらを見れば、世界のどこで、どういう環境問題がおこっているかを知ることができる。しかし、それは、とても要領よくというわけにはいかない。これらの報告はいずれも断片資料にすぎないからだ。

ウ・タント氏がまとめた国連事務総長報告は、浅くはあるが問題を広く全世界的にとらえていた。これが同報告書に対する大きな反響がおこつた原因であるが、もう一つの反響を支えた大きな原因があつた。これは環境問題の専門家が意外なほど見落しがちな点だが、環境問題を世界的に見る時、ぜひともはっきり認識しておかなくてはならな

いことなのだ。

米ソの宇宙競争

その見落としがちな点とは、米ソの宇宙競争である。

米ソの宇宙競争は、具体的には一九五七年（昭和三十二年）に始まった。熊本県の水俣に奇病があるといわれ、それがやつと社会的に騒がれたのが、この一年前で、米ソが宇宙競争を始めた一九五七年には、厚生省が生活環境汚染防止基準法案をまとめて国会に提出しようとした。ところが、この法案提出には各方面からいちゃもんがついた。まだ時期が早いというのだ。東京都が全国で初めての工場公害防止条例を制定したのは、これより八年前の一九四九年（昭和二十四年）であり、一九五五年（昭和三十年）には福岡県で公害防止条例と騒音防止条例ができていたが、こうした対応はいずれもまだローカルな問題であつて、国会が全国的なものとして国民の生活環境の汚染を心配しなければならぬほど差し迫つた問題ではないというのが一般の考えだつたのだ。じつさいには、当時の環境汚染はかなり急ピッチに進行していて、時期尚早どころか、だいぶ危機的な状況になつており、四年後の一九六一年には胎児性水俣病の存在が確認され、それから二年後の一九六四年には、厚生省に公害課が設置されるにいたる。つまりわが国の公害問題はこの時期に急テンポで表面化し、一九六十年代から七十年代にかけての公害、自然保護のブームを引きおこすことになるのだが、米ソが宇宙競争を始めた一九五七年のわが国の環境問題への一般の認識は、いわゆる“夜明け前”の状態だつた。

そのころヨーロッパでは酸性雨問題等を通して、環境問題は近隣諸国との国際問題化しはじめていたことは、前回の連載で見たとおりである。わが国では環境問題が時期尚早として国会でも問題にされず、日本国内のローカルな問題として片づけられていた時期に、ヨーロッパでは環境問題が一国をこえる国際問題として捕らえられだしていたところ、環境問題における東西の認識の大きな落差がある。そしてこの落差をさらに大きく引き離していく歴史的な大事件として登場したのが、米ソ間の宇宙競争だつた。

この宇宙競争は、のちに述べるように国連の人間環境会議にまで大きな影響をおよぼしていくのだが、ここではまず、その宇宙競争の実体をよく大ざっぱに見ておくことにしよう。

先に米ソの宇宙競争は一九五七年に始まったと書いた。だが、じつさいには宇宙へ進

出しようとする人類の野望は、ロケット開発とともに始まった。ロケットの威力は第二次世界大戦から知られるようになったので、ロケットをどんどん大型化、強力化して宇宙へ進出しようという人類の野心はほぼそのころからきざしたとみていいだろう。しかし、その野望をとげるには高度の技術と、とほうもない資金がいるところから、それは人類なら誰でもその野望をもてるものの、それを実現できる可能性のある人類は、ごく限られた一部にすぎなかつた。その限られた一部の代表がソ連とアメリカだつたわけだ。アメリカとソ連は太平洋戦争終了後、急速に対立を深めたが、一般的印象としてアメリカはだいたい何事においてもあけつびろげで、ソ連は秘密主義という傾向が強い。このことは一九五十年代末から六十年代にかけて、私がアメリカとソ連を旅行した時、個人的な立場からでも、十分に納得できたことだつた。ここでそれにまつわる私の個人的体験と印象を簡単に語っておくことは、米ソの宇宙競争の展開を理解するのにいくらか役立つにちがいない。

ソ連での優先待遇

私はここで当時のアメリカとソ連の旅について、くどくどと書くつもりはない。特にアメリカについては何も書く必要はなさそうだ。なぜならば、アメリカの旅は今日では学生でも気軽に出かけるようになったし、今年（一九八五年）には、何と私の近所に住む小学六年生の女の子が夏休みに一人でニューヨークへかけた。もつともその子は日本に母親といつしよに住んでいて、父親が長年ニューヨークで仕事をしているところから、夏休みを利用して父親のもとへ帰つたのだ。帰つたというのは妙だと思ふ人がいるかもしれないが、その子はニューヨークで生まれたので、アメリカ国籍をもつており、父も母も人種的には日本人だが、アメリカが生まれ故郷なので、日本からアメリカへ帰つたということになる。その子のアメリカへの旅は、日本側で空港まで母親が送り、航空会社のコンパニオンがその子の道中つき添い役をつとめ、ニューヨークでは父親が空港まで迎えにでるから、いわゆる純粹の一人旅ではない。しかし、いづれにせよ小学生が国際間を移動して歩くことが日常のこととして行われるようになったわけで、ひと昔前にはとても考えられなかつたことだ。とくにアメリカと日本の間の人の行き来はかなり激しく、アメリカについての日本人の認識は相当あがつたとみていいだろう。

だが、ソ連についてはナゾの部分が多い。これはひと昔前でも同じで、私がソ連へで

かけた一九六十年代には、ソ連についてよく知っている日本人は、ごく少数だった。ソ連へでかける前、アメリカやカナダへ出かけていたので、その時のソ連の旅は、私にとってかなりショックなものであった。そのショック印象のいくつかを次に列挙してみようと思う。その印象の多くは、米ソ宇宙競争の背後にある国力の差を理解するのに役立つように思われるからだ。

当時ソ連で得た数々の驚きは、ソ連を訪ねてみようという行動を開始した時、すなわち、旅行が始まる前からおこった。というのは、ソ連では行きたいところへ行けるとは限らないといわれたのだ。最初これはどういう意味なのか、よくわからなかった。アメリカでは、私は車と飛行機を使って、どこでも行きたいところへ自由に行った。だから同じ方法でソ連を旅行したいと思ったのだが、これはソ連では全く通用しないのだった。ソ連では外国の旅行者が行ける所は、あらかじめ政府がきめた観光地や都会だけで、それ以外のソ連国内を外国人が自由に歩きまわるといことは論外なのであった。もつと驚いたのは、泊るホテルまで政府がきめており、外国人の旅行は政府の旅行あっせん機関が一手に扱っていることだった。その機関はインツォリストといい、外国人のソ連国内旅行を全面的にコントロールするほか、旅先で外人旅行者のためにさまざまな特権行使できるようだった。特権行使というのは、宿の確保、観光施設の優先入場などが、これは旅先で何度か経験することになった。その一つはモスクワで観客が長蛇の列を作って入場の順番を待っていた博物館で、同行のインツォリスト係員が、突然、待っている人々の列の最前部へ私たちを割りこませたことだった。「皆が順番を待っているではないか」と私は係員に文句を言った。するとその係員は平然として答えた。「あなた方は外国からのお客様ですから、優先して入れるのです」

それはそうかもしれないが、何ともあと味の悪いものだった。しかも私はその時、係員のいいなりになって、怒った表情ひとつ見せず、私たちに順番をゆづったソ連の市民の柔順な反応に、ふしぎな思いを抱いた。忍耐強いというか、あきらめがいいというか、誰もいやな顔ひとつせず、又、ぶつぶつと文句をつぶやく人さえ見当たらないのだった。

このことでもつと驚いたのは、ソ連国内で天候不順のため、飛行機が山中の都市に避難着陸した時だった。その着陸する町は、外国人が訪ねることを許された町ではなかった。着陸したのは夜中だったが、空港のホテルは満室だった。ところがインツォリスト

の係員は、そのホテルで寝ていた人々を叩きおこし、毛布を持たせて廊下へ追いだし、私たちのために必要な数のベッドをあげさせたのだ。私たちがホテルへ入ると、部屋から追いだされた人が、何人も部屋の外の廊下に毛布をかぶってうずくまっていた。その人たちを横目で見て部屋へ入り、ベッドに横になったわけだが、この時もまた誠にあと味の悪い思いにさいなまれた。私たちはソ連政府に招かれた特別の外国人客というわけではなかった。ただソ連国内へでかけてみたいという一般の観光客が、ソ連の国策上、インツォリストによってひとまとめにされ、団体旅行に類した旅をしていたにすぎなかった。つまり行く先々で特別待遇を受けるのがあたりまえの国費などではなかったのだ。自由主義諸国の旅では考えられない優先待遇をうけて、むじまきに喜んでいる人もいたが、私は正直なところ、無気味さを覚えた。

この無気味さは、ソ連へ入国する時から始まった。私のパスポートには職業欄に、文筆業や作家を意味する *писатель* という記入があった。そしてたぶんそのためだろうと思うが、ソ連への入国時に、持っている印刷物やノートの類をくわしく調べられた。もつとも印刷物のチェックはほかの人々もかなり厳しく、女の裸写真がでている週刊誌や宗教画の類はことごとく税関で没収された。

ずれる価値観

ソ連の旅は船と汽車と飛行機を使ったが、そのいずれにも一等席、二等席などの区別はなかった。すべてが同等でいかにも共産主義国の乗物という感じだ。又、飛行機のはうが、他の交通機関より料金が安く、その理由は、広い国土を旅行するのに民衆が利用しやすいように安くしてあるということだった。飛行機のほうが運行にコストがかかるから高い料金をとるという考えではないのだ。その代り、飛行機のスケジュールはめちやくちやに等しかった。欠航、遅延、変更はごくあたりまえで、時には何時間も何日も空港で待たされる。しかも遅延や欠航を説明するアナウンスなど、ほとんどない。あらゆる交通機関が時間通りに運行されることになれている私たち日本人の中には、いらだつてインツォリストの係員にくつつかかる人もいたが、相手は落ちついたもので「天候が悪いから」とか「機体の整備中」とか答えるだけだ。空港で待つソ連の民衆はいずれものんびりしており、せかせかいらいらしている人など一人もいない。要するに社会的な日常感覚が、自由主義国のそれとは全く違うということなのだ。

ソ連の町には車が少なかった。そして見かける車はトラックが多い。都会の車ラッシュを見なれている日本人には車道がすいている大都會の光景は異様に映った。そしてその説明を聞いて奇異な思いにうたれる。つまりソ連では民衆にやたらに車を持たせないことにしており、その理由は、道路が無用の車でいっぱいになると建設のじやまになるからというのだった。しかし、どうしても車をほしいという人のために、車を手入れることは禁止していないが、値段が目玉の玉のとびでるほど高く、又、発注してから、二、三年は待たないと車がとどかないのだという。

すいている車道で老婆がツルハシをふるって道路工事をしていた。ソ連の建設とは腰の曲った老婆まで労働にかりだすことかと思つたら、これについては次のような説明があった。つまりソ連政府はすべての民衆のスタンダードな生活を保障しているので、老婆が道路工事をやる必要は全くないが、老婆が政府から支給される標準生活を営むのに必要な以上のお金を欲しいと考え、そのお金を得るために働きたいというなら政府はそれを拒否しはしないというのだ。ソ連では全員が住宅を支給されており、その住宅はむろん長い冬期を快適にしにげる暖房つきで、教育は大学まですべて無料。とびぬけた金持ちもないが、どうしようもない貧乏人もおらず、生活レベルも大学までの教育もすべてが人並みの標準を保証されている。だが、多くの人々に一定の生活を維持させるために物資の配分量が生産を上回り、常に物資不足だ。この点でもっとも驚いたのは、外国人用のホテルのトイレに、当時、古新聞の切った紙が尻ふき用としておいてある所があったことだ。

ソ連で私は何人かの民間人に会う予定をたてていた。だがホテルへ到着するたびにパスポートをとりあげられ、旅行者は政府が定めた町から四十キロ以上離れることはできないのだ。裏町の汚い公衆トイレを写真に写したり、空港や鉄道の分岐点などを写すことを禁じられ、禁を破って撮影した人はフィルムをとりあげられた。外国からの旅行者にはソ連の秘密警察の尾行が一人一人につくということが日本人の間で、まことしやかにささやかれたのもその時だ。私は一人で、あるソ連の民間人に会いにでかけた時、途中で何回かうしろをふりむいてみたが、あとをつけてくる怪しい人影は見なかった。だから秘密警察の追尾というのは、たぶん誇張だったのだろう。だが、目的の民間人に会ったあと、別れぎわに又ひとつ驚く経験をした。私はその人に、帰国後、手紙を書く

からと言った。これは私たちの社会では一種の社交辞令にすぎないし、そういうわれれば「待っています」と答えるのが、常識的な対応だ。ところが、その時、相手の人は、私の言葉に対して、「それは困る」といったのだ。一瞬、私は自分の耳を疑った。私たちは英語で話していたが、相手がなれない英語の選択をまちがえたか、私が聞きまちがえたかのどちらかだと思つた。そこで私は改めて自分の意志を伝えた。すると相手は、ていねいに、こう説明した。

「私たちは外国との交信をチェックされ、海外への旅行を禁じられている。もし私のところに海外から英文の手紙がくるようになると、私は困った立場に立たされることになる」

以上のことは今から十七年ほど前のソ連の実情だが、その時の旅は私に大きなショックを与えた。自由とは何か、国家とは何か、福祉とは何か、言論、表現の自由とは何か、そして人間環境と人間の対応との相関といういくつかの基本的なテーマについて、既成の価値感や、物事の考え方の尺度が自由主義国のそれとは著しく異なるものであることを知った。

この旅での私の印象は複雑なものであったがソ連とアメリカを対比した印象としては、今後、世界の覇権を握るのはアメリカではなく、ソ連になるだろうという思いが強かった。同時に当時始まったばかりの米ソ間の宇宙競争においてソ連がつぎつぎと優位を立証していく底力が何に起因するのかわかると、初めてわかつたような気がした。ソ連では私たち個人の自由については、多くの不自由が目立った。しかし社会集団としての自由な行動という点では、ソ連は大変な自由度をもち、国家的な目的の達成については、アメリカをはるかにしのぐ恐るべき力を持つことが、体験として納得できたのだ。

アメリカの出遅れ

ソ連が国家目的という行動力においてアメリカをしのぐ底力を発揮した典型の一つが、ソ連による人工衛星の打ち上げだった。

一九五七年十月、ソ連はアメリカに先がけて人工衛星スプートニク一号を打ち上げた。この時のアメリカのあわてようは大変なものだった。それまでアメリカは世界最高のロケット技術をもっていると自任していた。大陸間弾道ミサイルの技術は、第二次世界大

戦に使われたドイツのV2号ロケット技術を発展させたものだが、戦後ドイツのロケット技術者は大部分がアメリカに流れ、アメリカは最先端のロケット技術を独占していると思いきんでいた。ところが、ソ連は、突然、スプートニク一号を放った。これはソ連が大陸間弾道ロケットをしのぐ強力なロケットの生産と制御技術をもっていることを示していた。しかもスプートニクは、こともあろうにアメリカ大陸のはるか上空をめぐりに飛んだのだ。その人工衛星に、もし核爆弾がのつていたら、又、地上を撮影するカメラが装着されていたら、又、もしも病原菌などの有害生物が仕込まれていて、地上にばらまかれたら・・・等々、アメリカ側の懸念と憶測はとめどなく広がり、ついにそれは、ソ連によるアメリカ大陸の侵略という妄想にまで発展しはじめた。

超高空用ロケットの打ち上げにはロケットが超高温にさらされるところから、いくらなんでもそのようなロケットに生物がのることは不可能というのが当時の常識だった。ところが、スプートニク一号の打ち上げからわずか一カ月後に、ソ連は二号を打ち上げ、それにライカ犬をのせたのだ。

アメリカはあせった。アメリカでも人工衛星の打ち上げ計画は進行中だったが、その規模はいかにも小さく、衛星の重量一つをとっても、ソ連の衛星が第一号で八十六キロ、二号では五〇〇キロもあったのにくらべ、アメリカの打ち上げ予定第一号は、わずか十数キロでいどだった。そして、あせったアメリカはソ連の二号が打ち上げられたあと三日目に打ち上げを実施して、あえなく失敗した。発射したロケットは二秒後には墜落し、大爆発をおこして炎上してしまっただけだ。泣き面にハチとはこのことだ。

アメリカはますますあせった。だが、いくらあせっても巨大ロケット技術がそう簡単にととのうわけもなく、アメリカはその後二カ月間、ソ連に水をあけられたままだった。翌年一月末になって、アメリカは初の人工衛星エクスプローラー一号の打ち上げに成功したが、その重量は十四キロで、ソ連のスプートニク二号の五〇〇キロにくらべると、はるかに見劣りするものだった。これは大砲をぶつ放した相手にピストルを撃つてみせて対抗しようというもので、アメリカの劣勢はおおうべくもなかった。

このあと、宇宙ロケット技術については、アメリカはソ連にぬかれ放しになった。アメリカはソ連に対する優位を確保しようと、一九五八年八月に、月ロケットを打ち上げた。ところが、このロケットも爆発炎上して失敗。なにくそと十月にパイオニア一号

を放ったがこれも失敗。十一月に二号打ち上げ、又また失敗。十二月に三号を打ち上げたが、これも失敗。どの失敗もロケットの推進力不足など基本的なロケット技術の不足を示すものだった。

そして翌一九五九年一月、ソ連はアメリカの度重なる失敗をあざ笑うかのように、第一号の月ロケットとしてルナ一号を打ち上げて、みごと初の人工惑星を宇宙に送った。アメリカのあせりはますますはげしく、三月にアメリカは月ロケット、エクスプローラー四号を発射した。このロケットは今までのように推進力不足で地球の引力に引き戻されてしまうというようなことはなかったが、そのかわり、月から五万九千キロも離れたところを鉄砲弾のようにすつとんでいっただけだった。推進力を制御し、飛ぶ方向をコントロールする制御技術がともなっていなかったのだ。

長距離ロケットの制御技術が不足しているということは、戦略的に重要な意味をもつことはいくらでもない。いくら強力なロケットを飛ばすことができて、それを思うように誘導できなければ何もならない。ソ連が月ロケットを自由に操れるということは、同じ強力なロケットに核爆弾を搭載して、思いのままの場所へ撃ちこめるということの意味していた。又、そのロケットに生物化学兵器を仕込まれたら地球上の各地は、人間と生物の殺傷、環境の破壊など、ソ連の思うままといつてもよい。

ソ連はこのあと、矢つぎ早やに宇宙競争でアメリカを出しぬいた。しかもソ連の出しぬき方はアメリカがそのつどアタマにくるようなことばかりだった。例えばソ連のルナ三号はみごと月に到着し、ソ連の紋章を刻んだベナントを月面においてきた。昔ならこれで月はソ連領と宣言されても文句はいえないところだ。そしてそのあと打ち上げられたルナ四号は、月の裏側をひとめぐりして、裏面のように地上に写真電送した。こうして人類は初めて月の裏側を知ることになったわけだが、これが又、アメリカには背筋が寒くなるようなことだった。なぜならば、ソ連は今や必要とあればアメリカの国内を空から写真撮影して自国に電送させる技術をもっていることになるからだ。

こうした米ソの宇宙競争は、一九八一年に発表されたWCS(世界自然資源保全戦略)に微妙な影響をおよぼしていくが、その影響を知るためには、もう少し、米ソ間の宇宙競争をみておく必要がある。